



オヤジたちの熱い夜 —外伝

猫吉

オヤジたちの生態を赤裸々に描いた **問題作**

番外編が登場

時刻は午後三時。あくびの出そうなけだるい昼下がりであった。窓から入ってくる風の冷たさが秋らしい気配を感じさせる。

会社のパソコンはWindows 95へと変わり、裕介はマイナーなドローソフトで完工図を作成していた。CADよりも慣れてしまうと、こちらのほうが使いやすい。

どちらにしても、貧乏会社では何十万・何百万もするCADソフトは買えないのである。

同僚の山田が、裕介の席に近寄ってきた。

山田は三十二歳。この会社に六年も働いているが、そのあいだ外見がまるで変わらないという不思議な男だ。入社当時と姿かたちがそのままなのである。

四十過ぎてても、同じ格好をしているに違いない、あいつは年を取らないのかと噂されているくらいだ。

女性からしたらさぞかし、彼をうらやましく思うことだろう。

封筒から折り畳んだ紙を取り出した山田は「よかったら行く？」と裕介に訊いた。

その用紙には『いこまい会』の日程が書いてあった。そう、また今年もあの季節が巡ってきたのである。

「行きたかったのに、急に用事が出来てさ……」と、彼はうらめしそうに裕介の方を見ながら言う。

その表情には、裕介が「俺も都合が悪いから、山田が行ったらどうなんだ。先輩の命令だから、絶対におまえが行け」なんて言ってくれたらいいのにな、と24ポイントのゴシック体で書いてある。

去年の『いこまい会』は山田が参加したのである。きっとそのときに味をしめてしまったのだろう。

ちょっとした利権を握った小役人が、それを手放すのが惜しくてしょうがないといった姿に似ている。

裕介はそんな山田の思いを知ってか知らずか、興味なさそうに「あとで見るから、そこに置いて」と言っただけだ。

「モクモク手作りファームって、面白そうなのになぁ」

用事が済んだはずの山田は、裕介の横に立ったままで、まだ未練たらしく愚痴をこぼしている。

「研修会の案内」によると――今年は伊賀の里で「モクモク手作りファーム」を見学します、とある。

その「モクモク手作りファーム」というのは、地元の農家が共同出資してハムやソーセージ、地ビールを作っている所らしいのだ。

「地ビールって飲みたかったのになぁ」

彼は、サヨナラ満塁ホームランを打たれたピッチャーのように、あるいは何も出来ないうちに女に貢がされて捨てられた男のように、未練がましく言い続ける。

山田は上目遣いで、裕介の表情を見ていたが、やがて肩を落として自分の席に戻っていった。体中の息をすべてはき出すようなため息が、山田の席から聞こえた。

数日後、山田はファックス用紙を持って、裕介の前にやって来た。

そのファックスの内容によると、先ほどの研修会の日程が間違っていたらしい。

「あー、この日だったら行けたのに！」と山田は、裕介の前で大声を出し、おおげさに騒いだ。

それは味方のエラーで負けたピッチャーが自分の不運を嘆くようでもあり、せっかく若い女性を飲み誘うことに成功したのに「友達連れてきちゃった」と言われて心の中で「一度首締めたるかあー」と叫んでいるエロおやじによく似ている。

彼はしばらく裕介の前で「だまされたあー」とか「ついてないなあ」と騒いでいたのだが、裕介の無反応さに、何かを断念するように、うなだれながら、自分の席に戻っていった。

そうして、また体の中からすべての息を吐き出すような大げさなため息をついたのである。

彼は何か裕介に言いたい事でもあるような素振りだった。

山田はここに就職したときから運がないのである。

最初から正しい日程だったら、研修会に参加できて、地ビールを飲み放題だったろうに。日頃の行いが悪いのかもしれない。

山田は「二十年もやっていれば、身も心もボロボロになる」という阪神ファンである。

こうして、山田にささやかな不幸を、裕介にはささやかな期待感を抱かせながら、またしてもオヤジたちの旅が始まるのであった。

オヤジたち、モクモクへ

オヤジたち、モクモクへ

集合は朝の九時だった。場所はいつもの名古屋駅の旧壁画前である。

裕介は家から出ると、通勤と同じ時間のいつもの電車に乗った。何だか会社に通きに行くようで、これでは旅行という雰囲気ではないと思った。

名鉄の「新名古屋駅」で電車を降りて、それからJRの名古屋駅に行かなければならないのだが、このあたりも二年ぶりなので、ずいぶんと様変わりしていて、迷ってしまう。

いくつも階段を降りたり、昇ったりしていると、ようやく目的地のJR名古屋駅の入り口が見えて来た。

ここまで来る間に、どうしたことか、裕介の手の中にはティッシュの袋が三つも増えていた。

ようやく、旧壁画前にたどり着くと、集合時間の二〇分前であった。約束の時間前に来てしまうのが、サラリーマンの悲しい性である。

あたりを見回すと、不景気そうな顔をしたオヤジたちがポツポツと集合していた。

落ち目オーラが漂う集団から少し離れたところで、裕介は様子を見ることにした。近寄っただけで生気を吸い取られそうな気がしたからである。

すると、裕介の後ろからドスンとぶつかってくる人間がいる。

後ろに眼がついているわけでもないのに、裕介はぶつかってきたヤツが、ドジで眼鏡をかけた美人OLなどではけっしてなく、あのオヤジだなと直観した。

というのも、そんな事をしてくるのは、この世に一人しかいないからだ。

振り向いた裕介の前には北星電気が不機嫌そうな表情をして立っていた。

彼は裕介の顔を見たたん、いきなり「腹いてえ」とこの世の不幸を一身に引き受けたように顔をしかめると、腹を抱えた。

そして自分の演技の反応を確かめるように、裕介の顔をチラッと見ると「よっ。どこかこのへんに、薬局はないか」と裕介に訊いてきた。

病弱でナイーブな性格なので、ちょっとしたストレスで腹痛を起こす、いたいけな中年男性がうまく演じられたらどうかと、観客の様子をうかがう役者の表情をしていた。

これが、時代劇でよくあるように「持病の癢が……」とかいって、若い女性が道端でうずくまっていたら、たいていの人が親切に介抱してくれるであろうが、オヤジが「腹いてえ」といって道端でうずくまっていたら、かなり人間がそのまま素通りしてしまうだろう。

裕介は、そんなつまらぬ妄想から目覚めて「あのへんにたしか薬局があったはずだけど」と北星電気に言った。

相手が若い女性とかオヤジだとかで差別しない優しい裕介は、親切に駅の中にある商店街のほうを指さす。

北星電気は「そうか、じゃ案内しろ」と現場で鍛えた太い指で裕介の腕をがっちりつかむと、裕介の意志にかかわりなく、その方向へと歩き出した。

そのまま、一分くらい歩くと彼は「どのあたりにあるのだ薬局は？」と自分専用の案内役に尋ねるような横柄で、しかも翻訳口調で言った。

裕介はすぐそばにある薬局の看板を指さして「ほら、あの緑の中に白抜きで十字が書いてある看板が見える？」と病人をいたわる優しい元美青年の口調で答えた。

彼は「おう、あれか！」といいながら、裕介の腕から手を離れた。そうして、裕介の顔を見ると、冷たく言い放った。

「もう分かったから、帰っていい、おまえには用がなくなったから」

いらなくなったジュースの空き缶をごみ箱にほうり投げるように裕介を置いて、彼は商店街に消えて行った。

北星電気の後ろ姿を見ながら裕介は、彼の翻訳口調が気になった。

歩きながら、ふと思いついた。北星電気は今流行っているインターネットのエロサイトでも見ているのではないかと考えたのである。

裕介も海外サイトを閲覧するとき、翻訳ソフトを使ってみたことがある。だからそんなことを思いついたのだ。

集合時間の九時を少し過ぎた頃には全員が集合して、いよいよ研修会へと出発である。

裕介たちは駅のすぐそばに駐車してあったバスに、乗り込んだ。

バスが発車すると、さっそくガイドの挨拶がある。

今回のガイドは、前の（山中温泉参照）ガイドに比べると、中肉中背、年齢は二十三～二十五歳くらいだろう。

印象は薄く、町の中にも風景に混ざり込んでしまうようなところがある。

こんなオヤジたちの群れに放り込んで大丈夫だろうと、裕介が心配になるほど平凡でおとなしそうな女性だった。

しかし、オヤジたちの評価は裕介とは違っていた。

「今までの中では一番であろう」という声が聞こえた。

「いや、あまりに今まで、ひどいガイドばかりだったので、よく見えるだけだ」という妙に冷静な悟りを開いた意見も登場して、たわいのないことでオヤジたちは盛り上がる。

今までは対オヤジ用に鍛え上げられたバスガイドが用意されていたのだろうと裕介は思った。バス会社だってそのへんは抜かりがないだろう。

今回はなにか人手が足りなかったのか、それともそろそろ彼女もオヤジたちに慣れさせようという会社の方針でもあったのか。裕介はいろいろと想像してみるのだった。

ガイドの配る缶ビールが全員に行き渡ると、ガイドはさらにつまみセットを配った。缶ビールとつまみと、バスの外に広がる清純な女性の瞳に似た青空とくれば、旅行気分も熱を帯びるというものだ。

裕介は、配られた「おつまみセット」をそっとカバンの中にしまった。こんな所で、おつまみなどか食べていたら「モクモク」で肉やハム・ソーセージが食べられないではないか――とセコイ考えが浮かんだからだ。

旅行が終わったら家でおやつがわりにしようという、さらなるセコイ考えも浮かんでくるほど、裕介は貧乏なのである。

隣の席に座っている人の良さそうなオヤジは、裕介のセコくて、貧乏くさい思惑とは関係なく、缶ビールをグビグビ飲んで、バリバリと音を立ててつまみを食べている。人生に迷いなどなく、そのときが楽しければいいというタイプのようだ。

そのオヤジが先ほどから手にしていた新聞を読み終わって、カバンの中にしまおうとすると、後ろから「ちょっと、新聞見せてくれんか」という大きな声が響きわたった。

オヤジがビクッとして、後ろを振り向くと、あの北星電気が目の前に立っていたのである。

オヤジは自分の意志とは関係なく条件反射のように、北星電気に新聞を渡してしまった。

北星電気は現場で鍛えたガッシリとした手で新聞をつかむと「いやあー、内閣の組閣がどうなったか知りたくてね」となにやら言い訳めいた言葉を残して、自分の席に戻っていった。

「さあて、国際状況はどうなっているかね」というわざとらしい北星電気の声が響き渡った。

隣のオヤジはそれを聞きながら、さっき自分が読んでいた新聞に折り込まれていたらしい、薄っぺらなオマケを手にして途方に暮れている。

いつのまにか、分厚い新聞が折り込み冊子に変わってしまって、手品でも見ているような気分なのだろう。きっと、あの新聞をあとでじっくりと読もうと思っていたのだ。

それにしても、あの北星電気の絶妙のタイミングは、どうだろうか。どう考えてもバスに乗り込んだ時点で、新聞を持っている人間をチェックしていたとしか思えないではないか。

彼の用意周到さは「オヤジたちの熱い夜」で実証済みではあるが、それにしても熟練の技というか、見事なものである。

しかし、前回のように漫画雑誌をトレードする余裕もなくなっているのも事実だ。スケールダウンした北星電気に裕介はちょっと失望したのであった。

バスは東名阪をひた走る。ガイドは真剣に説明をしているのだが、オヤジたちはそんなことに興味がないのか、反応はほとんどない。

そんな気だるい……ビール飲んで、寝ちゃえばいいんじゃないの的な雰囲気、バスの中に漂っている。

「〇〇旅情殺人事件」……裕介が古本屋で三冊二五〇円で購入した文庫本の中の一冊である。退屈なバス旅行はトラベル・ミステリーを読むに限ると思って、前もって買っておいたのだ。

当然タイトルからして、千曲川（小諸）のあたりで殺人が起きる話だと思ったら、藤村の「千曲川旅情」の歌が関係してくるだけだったのだ。つまり小説の中で三番目の殺人（自殺？）が起きた頃、やっとバスは高速を降りると伊賀の里に入った。

それを合図にガイドは、伊賀の里について説明を始めた。だがほとんどの客はビールで気持ちよくなって、睡眠中なのである。ガイドはそんなオヤジたちを無視するように、事務的にガイドを進めていく。

「はい、ここで頭の体操です、右手に見えてきたレストラン、建物にいくつも龍がありますが、一体いくつ龍はあるでしょうか」

たしかに右手には大きなレストランがあって、その建物には屋根に大小とりまぜて、ざっと数えても十を越えるだろうと思うほど、龍の彫り物がつけてある。

「さあ、皆さんあの建物の後ろにも、龍がありますね、よく頭を動かして、見てくださいよ」

バスが移動して、レストランの後ろが見えてくると、たしかに建物の背後にも龍がある。

「さあ、皆さん、龍はいくつありましたか？ はい、これが本当の頭の体操でした」

「……」

裕介たちからは、なんの反響もなく、虚しくガイドのギャグは自爆したのであった。しかしガイドはこの反響を予測していたかのように、平然と次の説明へと移る。

頭の体操と伏線をはり、客にクイズと思わせながら、実はレストランをバスの窓越しに見させることで、頭の体操（運動）になっていたというオチだったとは。

脳みその体操という裕介たちの常識を、ひっくり返して、文字どおりの意味である頭本体の体操だったというわけだ。

すばらしい、すばらしすぎる。あのビル・ゲイツもびっくりして腰砕けになったあげくに、一万ドルでこのギャグを買い占めるかもしれない。

これはきっと、何十年もの間ガイドに語り継がれてきた伝説のギャクかもしれない。一人前のガイドとして認められると、はじめてこのギャグを伝授されるのだろう。

などと、裕介はひとり妄想に耽る。

さて、小説のほうは、安手のサスペンス・ドラマのように犯人が遺書の中に犯行を告白して終わった。

つまらぬ小説の余韻にひたりながら、この文庫本を定価で買った人の胸中に裕介が思いをはせていると、バスは広々とした平野に出た。

ここでは、ちょうど稲刈りのシーズンらしくて、農家の人たちが水田を行き来している。

まだ、刈り取られていない稲はざわざわと穂を揺らしている、なんだか昔の風景を見ているようで、少年の頃の思い出が蘇ってくる。

ガイドの説明によると、ここは伊賀米というブランドで知られている、結構有名な米の産地だそう。

そうして、いよいよバスは「モクモク手作りファーム」へと向かう。

秋真っ盛りの平野を抜けて、バスは山道を登る。しばらく狭い山道を走ると、その先に「モクモク」が見えてきた。

時間は十一時三〇分、ちょうど昼の食事をするには手ごろな時間だ。裕介たちは山のふもとに作られている駐車場にバスを駐めると「モクモク」に入った。

入り口には「地場産花野菜市場」があって、いかにも田舎の朝市を想像させるようなオバサンが、愛想を振りまいている。

通路の両脇には、新鮮そうなあまりスーパーなどでは見かけない野菜、果物、花なども置いてある。いずれも形が不揃いだったり、ゴツゴツしているところからも、農家の畑から直送された

ような、いかにも手作りという雰囲気がある。

しかし、そんな風景もなんだか作り物めいて見えるのだ。それに「市場」といってもほんの七、八メートルくらいしかないのだし、商売しているというよりも「手作り・新鮮・ヘルシー・自然」といったキーワードを醸し出すための演出ではないのか、裕介はそんなふうに感じてしまう。

オヤジたちの旅に参加するたびに、裕介は皮肉な考えとともに、世慣れていくのである。

ともあれ、裕介たちは冷やかすだけで、誰一人買うことなくここを、観光客というよりも単なる通行人として通過した。

さらに、坂道を登って、しばらくすると、裕介たちの目指す「バーベキュービアハウス」が見えてくる。

なぜかここは、正面の入り口が締め切りになっているので、わざわざ遠回りして、横手にある入り口を使ったのである。ガラス越しに中にある客を観察すると、オバサンの集団とか、アベック、若い女性の集団にほとんどが占められていた。

すくなくとも、オヤジの集団はわざわざこんな所までやってこないよな、いくら地ビールがあるといってもだ。というわけで裕介たちは周囲から浮きながらも「バーベキュービアハウス」へと突入する。

てんでばらばらに思いつきで席に座ると、さっそく地ビールで乾杯である。飲んでみると、濃密な味がして、まずまずイケる。

しかしここで、ガイドが言っていた「地ビールはおいしんですけど、どうしても値段が高くなるらしんですよ」という言葉が裕介の脳裏に蘇る、今回は値段は関係ないし、どんどん飲んじゃえということで、裕介たちはオヤジらしく無責任に盛り上がる。

この「地ビール」は三種類あり、裕介は全部の種類を飲んでみたのだが、その細かい味の違いは分からなかった。

多分、タダ酒しか飲まない裕介には高級すぎたのだろう。

喉の渴きを癒し終わると、次は食欲に移る。

大皿に盛ってある、キャベツ、カボチャ、ピーマン、玉ねぎ、肉（牛肉と思われる）、もやし、を次々に鉄板の上にほうり込む。

隣に座っていた営業マン風の男は、肉を食べるなり「うーん、あまりいい肉じゃないな」とグルメ評論家のように重々しく言った。

ところが悲しいことに、その肉は裕介にはとてもおいしく思えたのである。

まわりにいる人が話す仕事の愚痴などを聞きながら、裕介はひたすら食べる。もうしばらくはキャベツ、肉、カボチャに関しては、もう見たくもないと、満腹のお腹をさすりながら、思ったのであった。

大皿がほとんどカラになって、一段落ついた頃、右手にある生ハムの大皿にも手を出す、生ハムといえば、肉の親戚筋である。とにかく「肉は食べられるときに食べておけ」というのが、貧乏人の鉄則なのだから、生ハムをほっておくわけにはいかない。

「いやあ、最近生ハムにも食べ飽きたねえ」と中流階級の発言が出る頃には、生ハムの大皿は

、元生ハムが載せられていた大皿へと変貌を遂げていた。

裕介は満ち足りた気持ちになり、余裕が出て隣のグループの様子を見てみた。どうしたことか、隣はバーベキューの大皿の中身がほとんどが減っていない。

勝手にてんでばらばらに座ったおかげで、隣のグループは、老人で食欲がない人間、あるいは、中年なのでもっとあっさりしたものがいいと思っている人間、あるいは、俺はビールさえあればいいんだ、という人間が集まってしまったようなのだ。

隣のグループは裕介たちの鉄板に、焼けこげた元キャベツのようなものや、ほとんど炭のようになっている元肉しかない、という状況を見てとると、キャベツ、もやし、ピーマン、カボチャを大量に投入してきた。

目の前で再び、ジュージューと音を立てて焼け始めた野菜を見ながら、裕介は野菜ばかりではねえ、という思いはあったのだが、しかしこんな思いもしてきたのだ。ひよっとすると、明日、明後日には、こんな野菜さえも食べておけばよかった、と激しく後悔するのではと。

裕介たちのグループの鉄板上から大量の野菜があらかた姿を消した頃、バーベキューはお開きとなって、裕介たちは、てんでばらばらに、店を出る事になった。

外に出ると、赤ら顔をして、足取りも軽く、ふらついているオヤジを発見した。もちろん間違いなく裕介たちの一員である。

そのオヤジは何故か地ビールの販売所に近づくと「ねえちゃん、ビールはいくらだ」などと聞いているのである。あれだけ飲んでおいて、彼はまだ飲み足りないのであろうか。

裕介は腹ごなしにそのへんを散歩することにする。

すぐそばに「ハンモックの森」というのがあって、ハンモックに揺られて昼寝が出来るようだ。こうした所で、ゆっくり寝ていたらさぞかし気持ちがいいだろうなとは思っているのだが、バスの集合時間に間に合わないと困るので、未練たらしくハンモックの方を見ながら、近くの階段を降りて、池のほうへと歩いていく。

今日は、素晴らしいほどの晴天で、もう九月の終わりだというのに、暑いくらいだ。小道をダラダラと歩いて「カヌー池」にたどり着いたのだが、あいにく、水不足の為に池は閉鎖されていた。

その先には「パン・パスタ工房」や「PaPaビアハウス」などがあるらしいのだが、裕介はなんだか興味がわからないので、また小道をもとに戻る。

ちょっと散歩もしたし、駐車場にとめてあるバスに戻ろうかと裕介が思っていると、下り坂の斜面のところ、柵がしてある。

そこに馬が数頭放牧されている。

この馬はいったいなんのためにここにいるのであろうか、裕介は疑問に感じた。

その隣には「ミニぶたハウス」とかいうものがあり、一日二回ショータイムというものがあるらしい。今はその時間ではないらしく、客も二、三人しかいない。よくみると、小奇麗なブタが二匹ウロウロしている。

このブタはペット用の品種らしくて（ポットベリーというらしい）、子供が「カワイイ」などといいながら、まわりついている。

しかし、いくら品種が違おうといっても、殺されて生ハムにされてしまうブタもいるし、かといって、ミニぶたハウスショーなんてのもやっているし、なんだか調子がいいなあと思ってしまう。

生きて動いているブタの前で「焼豚専門館」…炭火でじっくりゆっくり焼き上げるあたり一面漂う匂いはたまりません（モクモク通信九月号より）、とか「ソーセージ手作り体験館」というのはちょっとムゴイのでは、などといつになく考えてしまうのであった。

またしても、裕介は世の中の裏側を知ること、皮肉スキルが上がってしまうのだった。

オヤジたちはニースの風を身にまとう

オヤジたちはニースの風を身にまとう

次は、「海の博物館」という手はずだったのだが、バスの発車寸前に添乗員から、こんな発言があった。

「えーっ、予定では次は海の博物館に行くことになっていましたが、海の博物館が最近場所を移転しまして、そこに行くとなると、有料道路を通っていかなければならず、有料道路代がかかってしまうので、今回は直接ホテルのほうに、そのまま行くことになりました」というのである。

——オイオイ、それにしても「海の博物館」が今もそこに有るかどうかくらい確かめなかったのかよ、という怒りは当然だと思うのだが、別に誰一人文句を言う人間もないままに、バスは当然のようにホテルへと向かうのであった。

どうせ、夜のどんちゃん騒ぎのためだけに集まったんだから、どうでもいいじゃないの的な、いかげんな雰囲気のまま、裕介たちは鳥羽へと向かった。

バスは伊勢自動車道をひたすら伊勢志摩国立公園、鳥羽へ走る。といってもこのあたりは来たことがないので、どんな所か分からない。

「伊勢戦国時代村」とか「鳥羽水族館」とかを横目で見ながらバスは走る。裕介たちのホテルは鳥羽湾の「安楽島」というところにあるらしい。

ホテルが近づいてくると、それまで大人しかったガイドが、自分は観光客ではなくバスガイドであることを思い出したというようにしゃべり出した。

「さあ、皆さんちゃんと起きてくださいね、ホテルについたらちゃんと貴重品はロビーに預けるか、金庫にしまってくださいね」

どうやら注意事項の説明らしい。これをしないと職務がはたせないというわけなのだろう。

「宴会は、六時から始まりますので、それまでにお風呂に入ったりしましょうね」ききわけのない子供を諭すような口調でガイドは言った。

「それでは、聞きますよ、宴会は何時からですか？」ガイドは、幼稚園児に聞かせるようなやさしい口調で裕介たちに訊いた。

「帰ったら、すぐ」とすかさず北星電気が軽薄に言う。これは皆に受けて、バスの中は大爆笑につつまれた。

狙い球を待っていたような、見事なセンター返しのバッティングである。

北星電気は、か弱いバスガイドをからかうバカな酔っぱらいオヤジを演じることにしたようだ。

「なんだか、おバカなオヤジが一人いるようですが、あとの皆さんはわかっていますよね、それと風呂場には絶対財布などは持っていかないようにしてくださいね」とガイドは、このくらいではメゲないのだ。

「お、俺、今鳥羽にいるけど……」と携帯電話で話している男がいる。

「四十スケのケーブルが、間に合わなくてヨウ、そんでもって、◎○なんもんで、ギャハハ」

オヤジたちは、ガイドの話など聞いていない。

「いいですか、財布は絶対に風呂場に持っていかない、風呂場というのは、財布を取られても、道路で財布を落としたのと一緒に、誰も責任を取ってくれませんからね」

とオヤジの無関心にも負けないで、ガイドは説明を続ける。

「……」オヤジの何人かはまだ寝ているようだ。

「グハハ」意味不明の笑い声がどこからか聞こえてくる。

「鳥羽でバスをトバしているところなんちゃって」携帯電話の男は、話を続けている。

「はい、皆さん宴会のことばかり考えていないで、ちゃんと説明を聞いてくださいね」

ガイドの声が一オクターブ高くなった。

「ねえちゃん、ねえちゃんも宴会に来るんだろ、ゲヘヘ」

信頼土木の社長が下卑た声でガイドをからかう。

「はい、私のことですか、私は子羊ですから、オオカミの群れには近づかない……と、こうなっていますから、だから行きませんからね」

「はい、皆さん、朝食はバイキング方式になっていますので、朝八時からですよ」

ガイドというのも大変な職業のようだ。これではまるで幼稚園の保育士である。

「では、最後に皆さん宴会はいつからですか？」アクセントを一語一語において、いい含めるように、ガイドは言う。

「帰ったら、すぐ」と北星電気が懲りずに、ツッコむ。これがまた受けて、バスの中は再び大爆笑だ。

裕介の脳裏に、北星電気の得意げな表情が浮かんだ。

「とにかく、中にはちゃんとした人もいますので、その人は皆さんを指導してやってくださいね、それとガイドを怒らせると、後が怖いですよ」

彼女の口調は柔らかいが、眉間にしわが寄り、口元は固く結ばれ、悪戯した悪ガキを叱るようなようになっている。

幼稚園児と化したオヤジとその保育士になったガイドを乗せたバスは、こうしてホテルに到着したのだった。

このホテルは、パンフレットによると「ニースの風を身にまとった新しいリゾートホテル」ということらしい。

ニースというのは、辞書によると「フランス南東部の都市で、地中海に臨む風向に恵まれた観光保養都市」のことだそうだ。

まあ、鳥羽湾を地中海に見立てれば、言っていえないこともないだろうが、しかし裕介たちのような客はどう見ても、地中海に臨む風向に恵まれた観光保養都市にやってくるのにふさわしい客とは思えない。

ロビーから眺める鳥羽湾の風景はなかなかのものである。

そうこうするうちに、部屋の割り当てや、風呂や食事場所の説明も終わって、いよいよ部屋へ

と向かう。

裕介たちは、四二四号室、五人の相部屋である。

昔は四人の時代もあったのに、いまや五人で一部屋である。

裕介はひたひたと迫る不況の影を感じるのであった。

部屋に入ると、ベッドは二つしかない。あとの三人は、六畳の和室で寝なければいけないようだ。さもないと、一つのベッドに二人寝るとかしなければならないだろう。

裕介は一つのベッドに二人、残りに三人の男がぐんずほぐれつしている姿を想像したところ、急にめまいがして、その場に倒れ込みそうになった

「この部屋で五人かぁ、かなりケチったねえ」とキッチンとスーツを着た営業マン風の男が、ホテル評論家がランク付けするように重厚に言った。

「だけど、なかなか景色はいいですよ」

どうみても退職してからの再就職としかみえない年配の男性が、窓を開けながらうれしそうに言った。

あとは、さきほどのホテル評論家風営業マンに良く似た中年男性と、年配の中小企業の社長風男性、裕介を入れて全部で五人である。

裕介たちは、奥の和室に座ると、よもやま話をして、時間をつぶす。なにしろ「海の博物館」を省略したので、まだ三時三十分なのである。

ダラダラと宴会までの時間潰しをしなければいけないのだった。

なんだかいつもヒマをつぶすことに専念しているような気がするな、と裕介は考えた。

五時頃まで暇をつぶしてから、風呂に行くことになった。

ここは、またパンフレットによると「コートダジュール風庭園風呂」ということらしい。

入ってみると、洋風ではあるが、なにしろ「フランス南東部」には旅行したことがないので、さっぱりどこが「コートダジュール」風なのかわからないのである。

風呂場からも鳥羽湾が見えて、これはまたこれで、よろしいのだが、どうにもおおげさな名前のように思えてくる。

あまりに上品すぎて、面白味に欠けるなど、身も心もオヤジ化している裕介は物足りなく思うのだった。

風呂から帰ると、あとは宴会だけだ。

営業マン風の男は、ちゃんとベッドに腰掛けて「ここは、まじめなホテルなのかなあ」と裕介に問い掛けてきた。

さりげなく腰掛ける事で、このベットは俺が使わせてもらうぞと主張しているところが抜け目ない。さすが営業マンである。

「パンフレットを見た限りでは、まじめなんじゃないかな」

裕介は興味なさそうに答えた。

「コートダジュール」風庭園風呂なのだから、まじめではないのとはしか言いようがない、ましては「ニースの風を身にまとった」なんだから。

「ここらへんの相場はいくらくらいなの」と営業マンは、ちょっと秘密めかした口調で、もうひ

とりの営業マンに訊ねた。

「なんだか五万円くらいらしいよ」と営業マンは、買う気のない客に値段を聞かれた店員のように答える。

「しかし、へんな病気に罹ると怖いからなあ」と営業マンは寂しそうに言った。それは値段が高いと思っているのではなくて、あくまでも病気が嫌なだけなんだと皆に説明しているようにも聞こえた。

なんだか、どこかで聞いたような会話だなというか、前にもこんな事があったようなと、裕介は記憶の底をすくってみると、これは「オヤジたちの熱い夜」のワンシーンに似ている。

そこで、彼ら営業マン二人をしげしげと見てみると、あの「オヤジ、山中温泉の夜に燃える」に出てきたあの営業マン三号、二号ではないか。あれから二年もたっているのですっかり顔を忘れていたのである。

オヤジたちの熱い夜

オヤジたちの熱い夜

いよいよ宴会の時間である。裕介たちは宴会場に向う。

ここは、さすがに宴会場「マジョーレ」とか「パラディッツ」とかいう名前はついていない、単なる「月の間」である。

和風の二〇畳くらいの宴会場で、もう料理が並んでいる。

料理といえば、鳥羽湾で取れる新鮮な刺し身とか、伊勢えびがどーんと載っていることを期待したのであるが、いたって普通というか、ひなびた旅館が出すようなありふれたものだった。

ここで、またなにやら裕介の脳裏に閃くものがあった。営業マン二号、三号、たいしたことがない料理、奥のほうに設置してある所々塗装の剥げた使い込まれたカラオケセット、これらのどこかで見たような、そうあの既視感（デジャールビュ）は一体何を意味するのだろうか。

みんなで乾杯をすると、いよいよ宴会の始まりである。

すると、それを待っていたかのように、コンパニオンが登場する。

和服を着た女性が三人、露出度の低い洋服を着た女性が二人という構成である。

これは裕介の個人的な想像であるが、これのために、料理は貧弱となり、一つの部屋に五人が寝ることになったのであろう。

こうして宴会の幕が開く。

裕介の近くでこんな会話が聞こえてくる。

「何年か前、このへんに会社の保養所があったので、遊びにきて、そのとき飼っていた犬を捨ててきたのだけど、二週間ほど経ったある日、うちのバアさんが——あんたうちの犬が帰ってきているよ、というので、玄関に行くと、捨ててきた犬が、ガリガリに痩せこけた姿でウロウロしていたのですよ」

再就職の初老の男性がしんみりとした、宴会にはふさわしくない話をしている。

「それからはかわいそうなので、また飼うことにしたのですが、こんな事ってあるのですねえ」
こんな話だったら「老夫婦とその愛犬の感動秘話！！、犬の〇〇が何百キロの苦難を乗り越え、再び玄関に姿を見せたとき、老夫婦は何を思ったのか！！」とかいって、どこかのおバカテレビだったら三時間スペシャルぐらいは作ってしまうであろう。

その時には、当然犬を捨てたのではなく、行方不明になったことにすればいいし、その後、老人はそれを気に病んで、寝たきりになっていて、帰ってきたことで、何故か病気も全快ということにすれば、おおいに盛り上がること間違いなしだ。

ついでに、グレていた孫がそれをきっかけにして、真面目に働き出したというような演出もありだろう。

すると、ちかくにいた営業マン二号が「うちもねえ、旅行に行くときには、ペットを行きつけの動物病院に預けていくのですよ、一日五〇〇〇円ですけど」という。

これも「最新ペット情報、ペットを預けられるホテル・病院三〇〇連発」などとすれば、三〇

分くらいはいけるかもしれない。

宴会とは場違いの茶飲み話を聞いていた裕介は、少し飽きてきて、別のほうに視線を向けた。

裕介の正面にいる顔見知りの信頼土木の隣に、コンパニオン五人の中では比較的若い女性が座り込んで、なにやらあやしい雰囲気漂っている。そこで、じっくりと観察する事にする。

「なにを言ってんだ、俺は社長だぜ」と信頼土木は、早くも酒で赤くなった顔をフラフラさせながら、コンパニオンに言った。

「うっそー、本当に社長なの？」とコンパニオンは信用していないようだ。こんなスケベオヤジがね、という表情をしている。

ところが、彼は本当に社長なのである。といっても「社長」というよりは「オヤジ」と社員はそう呼ぶだろうし、彼は世界一、重機を運転している姿が似合う社長なのである。

「どこから見たって、俺は社長にしか見えないうらう、グへへ」といいながら、ちゃんとコンパニオンのドレスの上から、いやらしい指使いをしているのは、確かに日本の社長さんの姿である。

。

「じゃ、本当はどんな人か当ててみようか」とコンパニオンは、彼のあやしく蠢く手を邪険に払いのけてから言った。

「おっ、俺ってどんな男？」と彼は、コンパニオンに邪険にされた手を今度は肩のほうに持っていきながら、期待に胸をふくらませて、言うのであった。必ず女体のどこかに手を置かないといけないうらしい。

「単なる、スケベ男！」と彼女は、毛虫を見る目で冷たく言った。

スルドイ意見である。ひよっとすると、彼女は男の真実の姿が映る鏡を持っているのかもしれない。

「俺って、スケベ男かあー」と、彼は言う。「じゃ、ほれ、こんな事もしていいんだろ、俺ってスケベ男だから」と居直ったのか、彼女に抱きついていく。

彼の中にある特殊なスイッチが入ったように、瞳孔が開き、いきいきとした表情になっている。それは「スケベ男」というスキルが突如開花したというふうだった。

「シャチョウ」から「スケベ男」という上級職へと転職して、勇んで冒険に旅立つ冒険者というところだろうか。

なにやら「スケベ男」という職業も捨てたものではないかもしれない。いや、かなり魅力的な職業かもしれない。

しばらくすると、信頼土木のとなりのコンパニオンは、和服中（三人いる和服女性を、若い順番に和服若、和服中、和服おばと便宜上呼ぶことにする）に変わっている。

コンパニオンが変わろうと、会社が倒産しようが、世界が明日滅亡しようが、いまや職業「スケベ男」になりきっている彼のやることは女体に触ることだけなのだ。

和服中は日本人ではないらしくて、発音がちょっと変なのであるが、日常会話くらいは問題ないようだ。

彼にとっては、会話などはあまり必要ではないらしく、それよりも肉体的接触によるコミュニケーションのほうが忙しい。

言葉よりも肉体言語さえ通じれば、彼には何も問題はないのだ。

次に露出の高い洋服を着たコンパニオンは、裕介の左向かいで、万全土建となにやらあやしい雰囲気である。

彼はコンパニオンの背後から左手を胸の中に入れて、彼女の隆起物をもみしだしている。まあ、悪代官が越前屋の提供した芸者を背後から、好色そうに抱き付いているという図を想像してもらえばいいだろう。

鼻息も荒く「ふっ、うい奴じゃのう、グハハ」という感じである。これが越前屋の罠にかかった町娘だと「まあ、いいではないか、もうどうにもなるまいて、越前屋とは話がついておるのだ」と言いながら、襖を開けると、隣の部屋には派手な布団があり、枕元には枕が二つ並べてある、という事になるのだろう。

オプションとして、「よいではないか」などと言いながら、町娘の帯をほどくと、独楽のように回転するというのも、マニア好みでよいかもしれない。

万全土建は六十歳くらいだろうか。長身の痩せた男だ。彫りの深い顔で、遊び慣れたオヤジに見える。

だが、よく観察すると、機械的に手は動いているのであるが、なんだか目が空ろである。女性を触覚で楽しみ、眺めて（視覚）楽しむというのが、普通だと思うのだが、彼は彼女を見るわけでもなく、遠くのほうを見ているのである。

彼には、何か人生の苦悩でもあるのだろうか、みんなに合わせて、バカなことをやらなきゃと思いつつも、まだ理性を完全に捨て切れずにいるのかもしれない。

今度は和服若である。彼女の隣に座っている男が、女性の下着を頭にかぶっているところを見ると、相当に盛り上がっているようである。

その下着男は「山中温泉」で、かっぱのかぶり物をしてカクカクと腰を振りながら踊っていた男と同一人物のようだ。

彼には特定の性癖があるようだが、本人の性的嗜好性をとやかくいう立場に、裕介はないので、オヤジのいちサンプルとして客観的に眺めているだけなのである。

和服若はどんどんエスカレートして、胸をはだけて、さらに下半身丸出しで踊りだした。だから観客に大受けなのだ。

残りの和服おばは、何故か裕介の横にいたのであった。

コンパニオンといっても、普段は朝市かなんかで、野菜でも売っていきそうなオバサンなのである。とにかくベロベロに酔っ払って、男なのか女なのかぐらいしか区別がつかなくなったり、ほとんど闇夜に近いくらいに照明が落としてあったりしないかぎりには、誰も相手にしないだろうという女性なのだ。

どうも彼女は、誰からも肉体的接触を求められないので、自分からその行為を行うのだが、この照明の明るい所では、誰からも喜ばれていないようだ。

さて、中盤を過ぎると、カラオケの登場である。裕介の鋭い分析によると、洋服組はカラオケ、お酌が主な仕事で、和服は客の相手というよりも、肉体的接触が主な仕事のように見える。

後半になると、いきなり照明が暗くなって、いよいよあやしい雰囲気である。

和服二人がカラオケの前のほうに出てくる（和服おばは自主的に参加を止めたものと思われる、たしかにそれは正しいことであると裕介も思う）、そうしていきなり脱ぎ始めるのであるが、しかし、それまでにうんざりするほど公開していたので、視覚的興味はあまりなかったのである。

どんなものでも、露出しすぎると、飽きるのも早いのである。

それよりも、またあの「山中温泉」のかっぱオヤジが、彼女らの中に強引に参加して、いきなり服を脱ぐと、一緒に踊り出したのである。

どうも彼は、裸にするのも、自分が裸になるのも、好きらしいのだ。ともあれ、彼の個人的な性的嗜好性に口をはさむのは、フロイトや性科学者、官能小説家にまかせておくべきだろう。

そんなこともあって、いよいよ宴会も終わりに近づいてきた。

そんなときに、万全土建が、和服若に誘われて、二人でカラオケを始めたのだが、これはちょっとした悲劇の始まりでもあった。

彼は、はじめの頃は、彼女の胸をさわりながら、いい気持ちで歌っていたのであるが、そのうちに彼女は彼のゆかたを脱がすと、彼の下着まで脱がしてしまった。

それから彼女は自分の顔を彼の下半身の方に持って行くと、なにやらあやしい事を公衆の面前で堂々と始めたのである。

裕介の方から見ていると、カラオケの譜面台がちょうど彼の下半身の中心部分を隠す格好になっていて、具体的に何が行われていたかは説明できない。オヤジの生態に詳しい人ならば、容易に想像出来るだろう。

思えば、昔は映画やテレビでも、濡れ場の場面になり肝腎の場面に、誰でも心の底からそれを見たい！という所に何故か、コップとか、花とか、水差しとか、ワイングラスとかが置かれていて、非常に腹立たしい気がしたものである。

中には、コップの中の水が、だんだんと小波が立っていき、最後の方ではコップの中からこぼれそうになって、急に揺れが止まったかと思うと、アノ行為が終わっていたという凝ったものがあったような気がする。

とにかく、昔はアノ表現も奥ゆかしかったものである。

さて、彼はコンパニオンのされるがままになっていて、それでもちゃんとカラオケを歌っているのである。彼は歌を歌い、彼女もまた違う意味での楽器を演奏していると、まあこういうことなのである。

それにしても、公衆の面前で、下半身をむき出しにして、カラオケを歌うという時の気持ちは、いったいどんなものなのであろうか。

さすがに、裕介もその気持ちを理解したいとは思わないのだ。

そんな事を考えていると、裕介の後ろの方で生真面目そうな中年の男性が「みんなの前で、下半身おったてるなんて、恥ずかしいなあ」とあきれたように言った。

裕介も同じことを考えていたので、彼に同意をあらわすように頷いたのであった。

そうして、カラオケが終わると、彼女は彼の浴衣を元通りにして、二人で戻ってきたのであるが、男性はかなり泥酔状態で、まっすぐ歩けないほど、足がよろけている。

案の定、席に戻ると、ぐったりと座り込んでしまう。彼女が甲斐甲斐しく介抱していたが、気がつく二人の姿が見えなくなっていた。

十分ほどして戻ってきたときには、万全土建は前よりも一段と酷く消耗しているように見えた。その姿は女吸血鬼にたっぷり血を吸われた被害者のようだった。

とにかく、こうして宴会は無事終了したのである。

営業マン二号が「指におんなの匂いがついて、手を洗っても消えやしない」とブツブツ言っているのが聞こえた。

彼は、風俗評論家でもあり、たまにそれを実践することもあるらしい。

裕介の目の届かないところで、想像もつかないような、いかがわしい行為がまだまだ行われていたようなのであった。

裕介が朝起きると、まだ六時前である。どうしても旅行に来ると、朝起きになってしまう。

風呂に入って、夕べの出来事をさっぱりと洗い流したいと、裕介は考えた。

さっそく、風呂へと向かう、たしか昨日の説明だと一朝は夕方と違う風呂になるので気をつけてください、ということだった。

朝と夕方では男湯と女湯が逆転するのである。

だから朝の風呂は「コートダジュール風庭園風呂」なのである。

「潮の香りと花々につつまれながら、リラックスタイムをお過ごしください（パンフレットの説明より）」ということなのだ。

さっそく脱衣場で服を脱いで、風呂に入る、ちなみにこの脱衣場もパンフレットによると「脱衣場（コートダジュール風）」と書いてある。こんなコートダジュール風のところで裕介たちは汚らしい体をさらけ出してもフランス国家からクレームはつかないのであろうか。

朝から入る風呂というのは、気持ちが良いものである。こんな朝早くの時間では一般市民は、きっとまだ寝ていることであろう。そんな非日常的な経験をするのが旅の醍醐味といえる。

こうして鳥羽湾を眺めながら、風呂（しかもコートダジュール風なのだ）に入っているというのが、背徳的でないではないか、裕介はそんなことを考えるとうれしくなるのだ。

部屋に帰ると、皆起きていた。

確か朝食は八時からだったので、それまで、ダラダラと時間潰しをしなければならない。

我慢することが、快樂を得るための一手段なのである。

「それで、昨日の万全土建はいくらだったの」と営業マン二号が風俗評論家のように訊いている。

「それが、一晩三万円だったらしいよ」と営業マン三号が答えている。

「ふーん、三万だったらまあまあだね」と営業マン二号は今後の参考にでもするのだろうか、なにやろうなずいている。彼は、ホテル評論家でもあり、風俗方面の評論家でもあるので、言葉に重みがある。あの人言うのだから、間違いのないのだろうと思ってしまう。

暇つぶしに旅館のパンフレットを読んでいたら、再就職男性が「ありゃ」と声を上げた。

その言葉に、残りのヒマ人四人が反応した。

「どうしたんです」と営業マン三号。

「いやあ、これによると、朝食は朝の七時からやっていると書いてあるんですよ」

再就職男性が、スーパーの特売品を報告するように、皆の顔を見ながら言った。

「バスガイドは朝の八時からですよ、としつこく念を押すように、言っていましたよね」

裕介は、信じられないというようにつぶやいた。言葉とうらはらに、体は浮き足立っている。なにかだまされたという気持ちだった。

皆は、お互いに顔を見合わせると、着替えるためにいっせいに立ち上がった。

「早くしないといいものがなくなるぞ！」というせっぱつまった気持ちが、全員の表情にあらわれている。

どたばたと小走りになって、食堂に向かった。

朝食はバイキング方式である。七時すぎだというのに、食堂はもう満員だった。

どこの部屋でも、朝七時からやっていることを発見していただらしい。というよりも誰もバスガイドの言ったことを信じていなかったのだ。

裕介たちは、満員の食堂の中を右往左往して、やっと布団部屋（というか物置に近い）みたいなところを確保して、全員が座ることが出来た。

なんとか立って食事することだけは避けられたのである。

食事していると、いこまい会の仲間がその辺をウロウロしている。なにか情報格差というものを裕介は実感していた。安全なところから、うろうろしている連中を眺めるのは楽しい。たとえ布団部屋住まいであっても、住めば都という気分になる。

なんとか食事も済み、ゆっくりとお茶を飲みながら「誰々がガンで死んだらしい」とか「最近こんな大きな結石が出て」とかいった、食事時にふさわしくないオヤジっぽい会話をしていると、あたりには誰もいなくなって、裕介たちだけがポツンと取り残されたようになっていた。

すると「食事は八時からですよ」というガイドの言葉を信じて、教えを守った集団が一組、のんびりとやってきた。

彼らは、ガラガラになった食堂を我が物顔に使っている。傍若無人といったところだ。

裕介は、彼らの食事風景を横目で見ながら、なにか納得いかないものを感じた。

今まで住んでいた狭い団地の近くに、あとから来た連中が豪華なマンションを建てたというような、新参のくせに、というくやしい気分になるから不思議だ。

それでも、今頃から来ても、めばしい料理はないだろうさ、と思うことで裕介は、気持ちを落ち着かせた。

ところが、後から聞いた話では、食べ物もちゃんと残っていたというのである。

すぐになくなくなると思われていた食べ物も、十分に補充されていたらしい。信じるものは救われるのかもしれないのである。

オヤジたち、お伊勢さんへ

オヤジたち、お伊勢さんへ

「ゆうべは皆さん、大変だったそうですねえ」というガイドのからかいの言葉から、今日の旅行は始まった。ガイドの口元には「皆さんの馬鹿騒ぎを全て知っていますよ」というような笑いが浮かんでいる。

バスは伊勢志摩スカイラインを走って、伊勢神宮に向かう。

途中〇〇山とかいうところから見下ろす鳥羽湾は絶景である。こんな素晴らしい風景に感動するのも人間だし、タベみたいに本能を剥き出しにしてしまうのも人間である。

そんなわけで、オヤジたちは昨日の疲れが出たのか、大人しく寝ている。オヤジというのは、二日続けてバカ騒ぎをするだけの元気はないのである。

ガイドの説明によると、伊勢神宮には内宮と外宮があるという。

土産物屋は内宮の方が多いので、土産物を買うなら、ここで買いなさいというのだ。いずれにしても、何も買う気のない裕介のような客には関係のない話である。

伊勢神宮に到着したのだが、しかしここで一時間二十分も暇をつぶさなければならない。土産物を買うわけでもなく、観光地にもたいして興味があるわけではないという人間には、これだけの時間を消費するのは大変なのだ。貧乏人はいつでも、どこでも暇つぶしに苦労する。

裕介たちは、ガイドに追い立てられるようにバスから降ろされて、伊勢神宮に向かう。

ガイドは内宮入り口まで、裕介たちを案内すると、役所の戸籍係のような事務的な表情を浮かべて、集合時間にちゃんと集まるように言いのこして、さっさとバスの方に帰っていくのであった。入り口まで案内するのが、彼女の仕事らしい。

そうして、羊飼いに追い立てられてきた、裕介たち子羊は、そのまま内宮に向かうか、それとも「おはらい町」という土産物屋の密集している所へと向かうか、という二つの道のどれかをそれぞれ選ぶと、野放し状態になって、伊勢神宮に散らばっていくのであった。

裕介が選んだのは「おはらい町散策ひやかし」コースである。

ここ、おはらい町では、通路の両脇にびっしりと土産物屋、食堂が並んで、伊勢うどんとか、赤福もちを売っているのである。

そうして、そこをぐるりと一周してきたのに、まだ三〇分しか消化していないのである。このペースだと、ここを三周しないといけないな、と裕介は考えた。はたしてそれまで足腰が持つだろうかとも考えた。

まだ一〇時半くらいなので、観光客も少なく、いささか寂しいものがある。それにこの「おはらい町」で一番繁盛していたのは、プリクラだったのは皮肉である。

まだ時間が余っているので、伊勢神宮にも行くことにする。

バスに戻るとまだ時間が二〇分ほども残っている。

バスは環境保全のために、駐車中はエンジンをかけられず、クーラーが止まっているので、バスの中はととても暑くて、バスの中で休んでいることが出来ないのだ。

たまらず外に出て近くのベンチで座って暇を潰すことにする。

それにしても、一時間近くも、よく歩いたものである。ここで何かいいことがあったとしたら、戸外で運動したということだけだろう。裕介は、百二十キロカロリーくらいは消費したのではないだろうか。

しばらくすると、ポツポツと裕介たちの仲間が帰ってくる。彼らはたいていバスの中に入ると「アツー」とか言いながら、すぐ出てくるのである。そうしてお金に余裕がある人は、近くにある売店でアイスクリームなどを買ってしまう。

こんな駐車場に売店があって、ジュースやアイスクリーム、氷イチゴなどを売っているのか不思議だったのだが、こうした仕組みだったのだ。

バスのエンジンがかけられない、クーラーが利かない、観光客は暑くてたまらない、そこにアイスクリームが売っている、たまらず買ってしまう。とまあ、こうした流れるような集金システムが出来上がっているのである。

みながアイスクリームや冷たいジュースなどを飲むのを、裕介は横目で見ていたのだが、ふとバスの中にジュースがあったのを思い出した。

車内に入ってからガイドに言うと、ぬるい缶コーヒーが出てきた。

クーラーも止まっているのだから、当然車内の冷蔵庫も止まっていたわけだ。

そうして、またベンチに座ってタダで手に入れたぬるい缶コーヒーを飲んでいると、なんだか侘しい気持ちになってくる。

手に持った缶コーヒーを、むなしい気持ちでふと見てみると、カロリーの表示があって、なんと一本百五十キロカロリーもあるではないか。

缶コーヒーを一本飲んだおかげで、裕介の伊勢神宮での一時間分の運動が虚しく消え去ったのであった。

新旧バスガイド対決

新旧バスガイド対決

次は下宮に行くのである。もういいや、と裕介は思っているのだが、どうも今日はちゃんと予定通りに日程を消化するつもりらしい。

こちらは、内宮と比べると規模が小さく、観光客もまばらである。そうしてここも駐車場では、バスはエンジンを切っておかなければならないらしい。

そうしてちゃんとお決まりのアイスクリームも売っているのである。ここでは、ばあさんが昔のアイスキャンディー売りのような格好をして、獲物を待ち構えるクモのように網を張って待っている。

それにしても、これがばあさんではなくて、若い女性がバニーガールのような格好でタバコならぬ、アイスクリームを売っていたら、きっとばあさんの百倍は売れるであろう。

そうして、ガイドは裕介たちを事務的に入り口まで連れて行くと、またバスのほうに戻っていく。

「下宮」は、あまり広くないので、ほんの十分くらいすると、裕介たちはバスのほうに戻る。土産物屋もなく、たいして暇つぶしも出来ないので、あっという間なのだ。

バスに戻ると、営業マン二号がアイスクリームをなめている、そういえば彼は「内宮」でもアイスを食べていたような気がするのだが。さらに思い出したのだが、前の旅行のときにも、何回かアイスを食べていたような気がする。

営業マン二号は風俗評論家、ホテル評論家を兼任しながら、アイスクリーム評論家でもあったのだ。

まあ、彼がいたおかげで、ばあさんはこの暑い中、立っていた甲斐があったというものである。

時間の都合なのだろうか、バスはなかなか出発しない。

しばらくすると駐車場に観光バスが入ってくるのが見えた。そのバスは裕介たちと同じ会社のものではあった。

なにげなく、それを見ていると、バスからゾロゾロと観光客が降りてくる。家族連れや若い男女で、裕介たちみたいなオヤジたちとは客層が違う。

最後にガイドが降りてきた。

真新しい制服を着て、動作も軽やかだ。何よりも楽しくてしょうがないという笑顔が印象的だ。

裕介たちのガイドは「〇〇ちゃん」といいながら、手を振りはじめた。それに気がついた向こうのガイドも懸命に手を振っている。

うちのガイドは、バスを降りると、向こうのガイドに駆け寄ってうれしそうに手を取り合って、喜んでいる。

「おっ、あっちのガイド、かわいいなあ」と誰かが目ざとく発見して言った。こうしたことだ

けは、オヤジといのは素早いのである。一時間以上歩き回っても、こうした刺激で容易に元気が回復するのだ。

「しかも、あっちはちゃんと帽子をかぶっているじゃないの」

仕事に慣れてしまって帽子をかぶるのが面倒になってしまったうちの自堕落なガイドをを責めるように、また誰かが発言する。

「しかも、若い！」とさらに追い討ちをかけるように言う。

「よし、交換してもらおうぜ」とさっきまでダラダラしていたオヤジが超強力栄養ドリンクをがぶ飲みしたように元気はつらとして叫ぶ。

発言したのはやはり、北星電気だった。今日はバスガイド・トレードを画策する正体不明の東洋人を演じることにしたらしい。

「どうして、うちにはあんなガイドで、向こうはあんなにかわいいガイドなの」と世の中の不幸を一身に背負ったような声で言うオヤジもいる。

ガイドがないからなのか、みんな言いたい放題である。たしか出発の時には今までで一番だとかいっていたはずなのに、あまりに酷い仕打ちではないか。えてしてこの世はこんなものなのかもしれない。

まあ「隣の芝生は青く見える」という、ことわざもあるのだが、急に手のひらを返すような態度はどうであろうか、裕介は腕組みをしながら、オヤジ評論家のように心の中でつぶやいた。

「まあ、俺達オヤジばっかだから、ちゃんとバス会社も対オヤジ用のガイドをつけたんじゃないの」と妙に醒めたスルドイ意見も飛び出す。

そんな事を言っているうちに、ガイドが戻ってきた。

「あの子は、私の後輩でかわいがっていたんですよ」と彼女は、今までの裕介たちの会話を知らないのか、うれしそうに話しかけてきた。

「なあ、向こうのガイドのほうがかわいいから、トレードしてくれんか。同じ会社なんだし」と真剣な表情で、北星電気のオヤジが言う。

「向こうの方が、客に愛想がいい」だめ押しのように調子に乗ったオヤジが言った。

いかんなあ、思い込みで言ったら、だいたい向こうのガイドがどんなものなのか誰も知らないんじゃないの——と裕介は心の中で思った。

「向こうの方は、客に怒ったりしない」

それはそうかもしれないと思う。それよりも向こうのガイドだったら思いっきり怒られてみたい気もする。

「向こうの方は、若い」

裕介もそう思うし、彼女の後輩なのだから当然若いであろう。

「向こうの方は、かわいい」

とまあ、サンドバックのようにガイドは打たれつづけるのであった。

「だけど、うちのバスのほうが新しくて、高いんですよ」

とガイドは頬を膨らませ、険しい表情をして言った。

しかし、新しくて高いのはバスであって、バスガイドではないのである。あまりにも悲しい反

論に裕介は心を痛めた。

「それだったら、向こうのガイドと交換したら、新しくて、高いバスと、かわいくて、若くて、愛想のいい、初々しいガイドが手に入るんじゃないの」

極めて冷静な、実を射た意見である。なぜかここにきてオヤジたちが急にさえてきたのである。

これには一同、思わず納得だ。

彼女はなにか言い返したいが、あまりに正論なので、反撃するきっかけがつかめないという様子だ。

まさかここまでオヤジ風情に追い詰められるとは思ってもいなかったのだろう。

ガイドの顔がひきつってきているのがわかる。客の手前、笑顔を作ろうと努力しているのだが、理性は笑えと顔の筋肉に命じても、心の部分がそれに応じないとでもいうように、どうしても不思議な表情になっている。

「とにかく、バカなことをいっていないで、さあ出発しましょうね」と彼女はなんとか冷静さを取り戻して言った。

彼女だって入社当時は、ういういしくて、ちゃんと帽子もかぶっていたのだろうに、年月というのは残酷なものである。

あと何年もすれば、向こうの若いバスガイドだって、彼女みたいになるのかもしれないのだ。裕介はそんな皮肉なことを思って、ますます世間ずれしていくのである。

旅の終わりは松阪牛

旅の終わりは松阪牛

昼は松坂で「松坂牛」を食べることになっていた。

場所は「まるよし」という店である。観光客相手のドライブインというわけではなく、普通の料理店であった。

裕介たちは、追い立てられるように二階に連れて行かれた。すでに準備良く料理が用意されている。

網焼き風のコンロと、その周りには野菜と、肉（これが松坂牛なのだろう）が置かれている、あとは火をつけて、網に材料を載せるだけである。

手間暇かけるのがいやなのか、店員がなかなかやってこないで、たいてい場合は自分達で用意する事になる。

グループの中には必ず世話好きな人間がいる。彼らは自分で仕切るのが楽しくてしょうがないというふうに、いそいそと頼みもしないのに、やってくれるのだ。

コンロに火をつけ、材料を偏らないようにバランスよく載せる。手の空いている人間が、ビールの栓を開け、勝手に乾杯をして、グキュ、グキュ、プハァー、うまい、とこうなるのだ。

ジュージューと焼ける肉から旨そうな匂いがして来て、これがまた食欲を刺激するのである。

前の日に「いい肉使ってないなあ」となにやらグルメ評論家めいた事を言っていた営業マンは、今回の肉については「結構、肉がやわらかいねえ」と相好を崩して高い評価を下した。さすがは松坂牛である。

ひょっとしたら、明日という日が来ない――地球最後の日のような気持ちで、裕介は肉を中心に食べまくる。

一息ついて、ふと横をみると、一人だけ元気がない人がいる、あの恥ずかしい姿を公衆の面前に晒してしまった、あの一晩三万円の男性である。

それとなく観察していると、食べ物をほとんど残して、夢遊病者のような足取りで、姿を消したのである。――体の調子が悪いので、バスで寝ているというようなことを、言い残して部屋から出ていった。

生気を吸い取られた人間というのを聞いた事がある。彼こそが、その典型だろう。「これが生気を吸われた人間の実例です」とか書いて、百科事典に載せたいぐらいである。

これは眉唾物の話であるが、男性がその人生の最後に精を放つ（なんという奥ゆかしい表現であろうか）時には、赤い玉が出てくるらしい。

要するに、赤い玉が出たら、もう打ち止めということなのである。

彼はきのう赤い玉が出てしまったのかもしれないのだ。

食事も終わり、裕介は満足感にひたりながら店を出た。こんな幸せな気分はもう二度とないだろうというような気分だった。

出入り口に置かれたショーケースの中にある料理のサンプルを、じつくりと眺めている男が

いる。

彼は、自分たちの料理がどのコースだったのか調べているらしい。

「うーん、これが俺達のヤツだな」と言うと、ニヤリとほくそえんで、足取りも軽く店から出て行った。

うれしそうな表情からして、裕介たちの食べた料理の金額は彼にとって満足のいくものだったのであろう。これはいわゆる小さな幸せというものであろうか。

小さな幸せを嘔みしめる男、生気のない男、その他もろもろのオヤジたちを乗せて、バスは帰りの旅路をひた走るのであった。

完

※この作品はフィクションであり、実在の個人・団体等とはいっさい関係がありません。

オヤジたちの熱い夜――外伝

<http://p.booklog.jp/book/57241>

著者：猫吉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nekokiti2001/profile>

Twitter 猫吉@nekokiti2001

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/57241>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/57241>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ